

近代地理学の祖
長久保赤水 (1717~1801)

長久保赤水是、江戸時代の儒学者である。高杉晋松の慶應に逢まれ、晋松を認められて第2代水戸藩主治政の指導 (顧問) とし、江戸に駐紮するが、地理学・天文学・歴史学等多岐の分野にわたる研究業績を残した。2020年3月19日、国は赤水資料750点を歴史資料として重要文化財に指定した。



赤水を育んだ社会情勢

江戸時代の武士は、その地位を保持する上からも学問を学び教養をつむべきものとされ、儒教を敬って主たる学問として儒学を学んだ。また、藩主は自分の教養を高めるために儒学を敬って讀書をさせ、藩士たちも讀書をさせ、一方、庶民は寺子屋や私塾等学び、赤水も鈴木玄淳塾で儒学を学んだ。第2代水戸藩主の御用文化人は、「大日本史」編纂のために宛有である彰考館を赤松川に開設 (1663)、その歴史的な史館員を水戸へ移転させて赤松考館を発足 (1697) するなど、学芸振興の政策を取った。彰考館には全国各地から集められた資料が蓄められ、史館員による研究が進められた。光圀の死後、学芸振興の意志は十分に継承されたが、第2代水戸藩主治政 (赤水が在野した治政) の時代になってようやく復興した。赤水と親交のあった歴史家は彰考館の文庫役、字の立派な書生は彰考館長官を務めており、赤水は彰考館の資料を閲覧する機会に恵まれていた。また、学芸、文化の発達が度々促されてきた時代、赤水は各地の文化人と進んで交流し、多くの知識人から豊富な情報を得ることができた。



赤水図 (改正日本輿地路程全図) の変遷を比較しよう！

ここでは、高杉市歴史民俗資料館が所蔵している原図、初版、第2版、第3版、第4版、第5版の6図を掲載して、長久保赤水(1717~1801)の「改正日本輿地路程全図」の変遷を紹介する。江戸時代後期の約100年間のベストセラーであり、吉田松陰や江戸時代の庶民、さらには、伊能忠敬などが見ていた地図である。これらの6枚の地図の細部を比較すると赤水図の様々な変化と発見があることがわかる。

《長久保赤水関係資料693点》
国の重要文化財指定記念



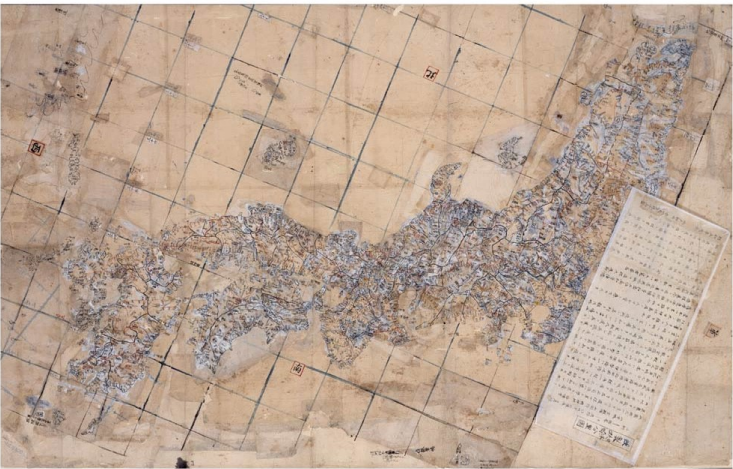
長久保赤水 自画像
長久保赤水著 長久保赤水書 著者自筆



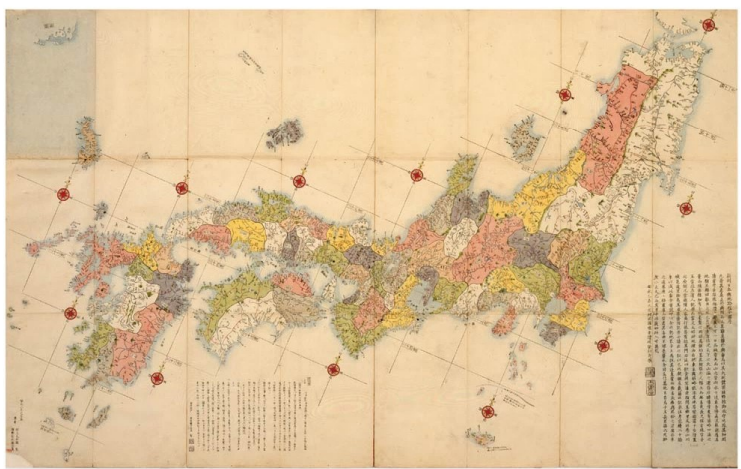
高萩駅前に建つ長久保赤水像



長久保赤水 自画像
高杉市歴史民俗資料館蔵 (長久保赤水著者資料)



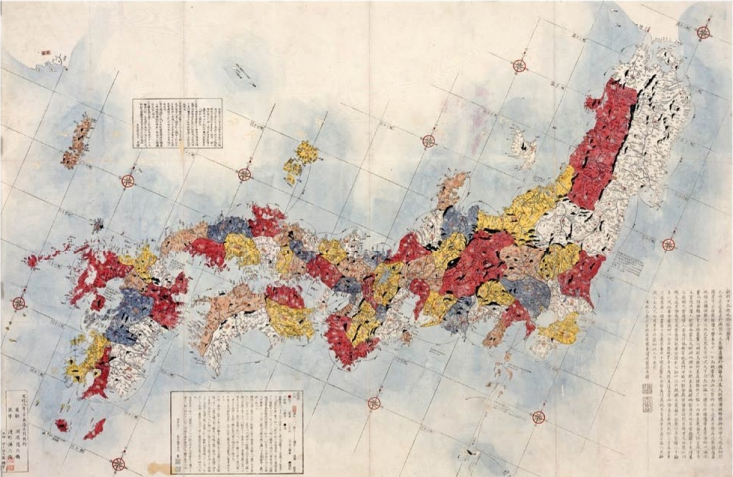
改製日本分里圖 長久保赤水手書圖 84.6×134.8 cm (全 92.7×190 cm) 明和5年(1768)日本地図の原図 高杉市歴史民俗資料館蔵(長久保赤家寄贈資料)
赤水は、赤松村で20年以上の歳月を費して、この「改製日本分里図」(赤水図の原図)を製作した。地形や地名には納物による多くの修正痕や和紙を何枚も重ねて書きおした跡が残っており、長久保赤水が検証しては、そのつど修正していたことがみとれる。本図には、鹿島灘を塞ぐように船橋が貼られており、そこに「改製日本(扶桑)分里図」と記され、明和5年(1768)の年号をもつ。扶桑とは日本の異称である。本図は「改正日本輿地路程全図」の原因と考えられている。しかし、今回の文化庁の調査で、扶桑に付けられた○は消去のしるしであると分かった。今までは、扶桑を強調しているものかと思っていたので「改製扶桑(日本)分里図」と表記してしたが、今後は「改製日本分里図」と改めて表記することにした。また、この図は「安井春海の所考」として、はじめて緯度を記入した日本図である。奄美群島や琉球諸島は描かれていないが、蝦夷地の南端、対馬、朝鮮半島南東端は描かれ、さらに日本海には竹島と松島が描かれる。



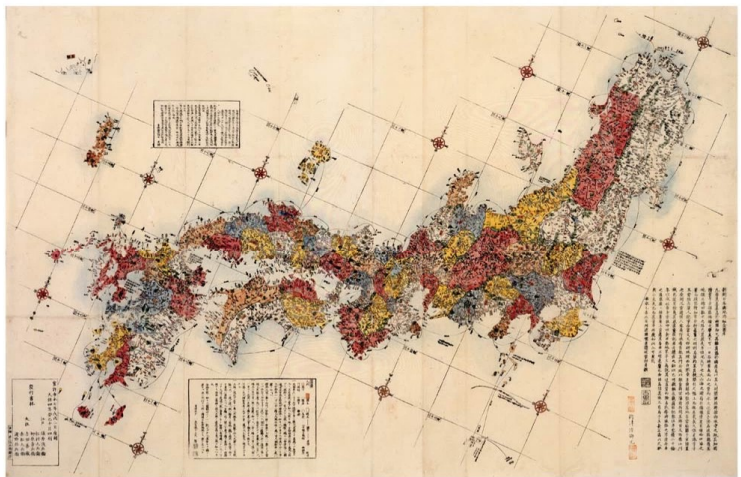
改正日本輿地路程全図 安永8年(1779)初版 81.8×131 cm 高杉市歴史民俗資料館蔵(長久保水廻影会寄贈資料)
この「改正日本輿地路程全図」の初版は、安永8年(1779)に完成、翌年の春、大坂で出版された。この図は、10里(約40km)を1寸(約3cm)とする約129万6千分の1の小縮尺の日本図である。それまでの刊行日本図とは異なり、緯線と経線が引いた点で、画期的な刊行日本図である。大坂の書肆滝野孫兵衛より刊行。讃岐国の備前鞆栗山(1736~1807・寛政の三博士)の序文があり、赤水は栗山と学問的交流があったことがわかる。高杉市歴史民俗資料館蔵の安永8年版「改正日本輿地路程全図」は、4点あるが同じ刊行年であっても、何度か赤水が修正を加えていたことがわかる。本図には、右上部の大島・小島が書かれていない。また、下北半島は扇形に描かれており、下北半島をはじめ、古河周辺の河川、牛久沼と小貝川、館林、大和国の奈良・春日、讃岐国の尾山などを比較するとその違いが分かる。4点の中では最も古いものである。さらに、約4,200の地名情報などが掲載されている。



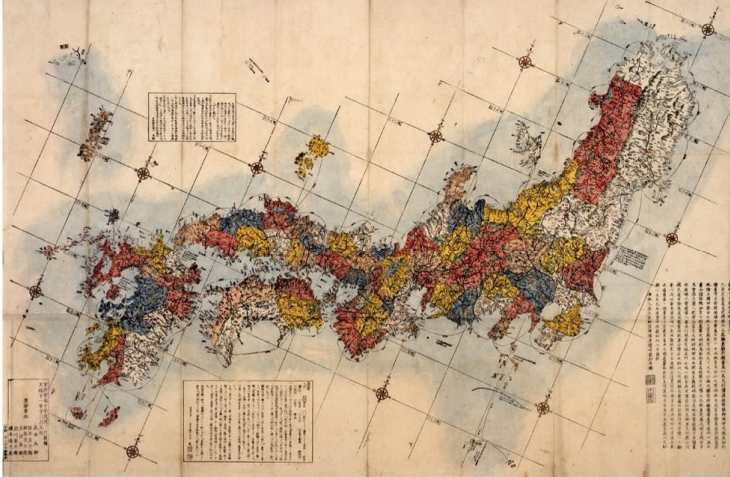
改正日本輿地路程全図 寛政3年(1791)第2版 83×128.5 cm (全 134.5×179 cm) 高杉市歴史民俗資料館蔵(長久保赤家寄贈資料)
次に、赤水図の集大成といえる第2版である。高杉市歴史民俗資料館蔵の寛政3年(1791)「改正日本輿地路程全図」の第2版は3点あるが、この図は着色試作品と思われる。初版図との大きな違いとしては、海路(港から港までの距離)や部分図(郡名の記入)、図の左上の漸次音節部の付加などが挙げられる。また、第2版から四つ音節には、初版にはない赤井嶺の書き込みが見られる。さらに、地名表記などの情報量も飛躍的に増加し、国の色分け彩色も変化した。赤水が存命中に編集したのは、集大成といえるこの第2版図までである。初版とこの第2版を見比べると、地名情報なども約6,000と飛躍的に増加している。同じ赤水図でも初版とは、全くの別物であることがわかる。本図では、【長田伊豆七島】となっており、伊豆七島への里数は、まだ入っていない。赤水図はこれで完成した。第3版以降は、第2版の情報をそのまま用いることで刊行されていた。



改正日本輿地路程全図 文化8年(1811)第3版 85×129.7 cm 高杉市歴史民俗資料館蔵(横山功次寄贈資料)
赤水没後に出版された地図。この第3版からは、大坂が引けなく、江戸でも販売され、京都：須原屋茂兵衛、浪華：滝野孫兵衛とある。その後、同じ第3版でも、京都：野、浪華5軒と版に販売する書肆(書店)が増え、幕末でのベストセラーとなった地図である。



改正日本輿地路程全図 天保4年(1833)第4版 87×134.6 cm 高杉市歴史民俗資料館蔵(横山功次寄贈資料)
赤水没後に出版された地図。この天保4年の第4版では、江戸：須原屋茂兵衛、大坂：松村九兵衛、神原春兵衛、吉田蕃蔵、赤松九兵衛、滝野孫兵衛となり、江戸1軒、大坂5軒となっている。



改正日本輿地路程全図 天保11年(1840)第5版 85.7×130.4 cm 高杉市歴史民俗資料館蔵(横山功次寄贈資料)
赤水没後に出版された地図。この天保11年の第5版では、浪華書肆：森本友助、浅井(マ)吉兵衛、神原春兵衛、吉田蕃蔵、新川春兵衛、橋本兵衛となり、浪華の6軒となっている。

(協賛) さとうもとの総合法務行政書士事務所 (東京都千代田区)

(協賛) ホコタ設計コンサルタンツ株式会社 (茨城県野田市)

(協賛) 株式会社 Dr. 企業 (茨城県つくば)

(協賛) 社会福祉法人 愛季会 (茨城県高萩市)

(協賛) 川島山 政泰寺 (茨城県高萩市)

(協賛) 大部満徳会計事務所 (茨城県高萩市)

(協賛) 有限会社 上田商事 (茨城県高萩市)

*順不同

*この地図は全国より多くの情報のご支援をいただき制作されました。
【長久保赤水顕彰会 クラウドファンディングProject】